

韓国の居住空間における眺望に関する研究

- 宗家と亭の關係に着目して -

A study on the prospects of the residential space in Korea

focusing on the relationships between jong-ga and jung

96M43080 鄭 泰烈

指導教官 斎藤潮

Synopsis

In Pung-su (風水) theory, Jong-ga is regarded as a optimum residence while jung is the house which commands a fine view. nineteen jong-ga and forty-five jung in eighteen villages of Korea are examined in this study, through reconnaissance and topographical analysis so that prospect characteristics of those places are revealed.

As a result, the following features are uncovered; (1) the meaning of the prospect from Jong-ga is to realise the excellence of surroundings inside of Gug(局) which is a topographical form of a village. In particular, the view of an-san (案山) from jong-ga leads to strong cognition of ju-san(主山) facing to an-san and jong-ga at the foot of ju-san; (2) the meaning of the prospect from jung is a supplement of the view from jong-ga. Jung has two roles, that is, to release self from the Pung-su theoretical world and to recognise the stability of it by confirming the unity of ju-san and jong-ga; (3) the prospect from jong-ga and the one from jung are complements each of the other.

第一章 はじめに

1-1 研究の背景と目的

近年の都市化・工業化は都市眺望に大きな影響を与えている。

これに対し、眺望圏の確保のために高度制限区域を定める都市や地域も見られるが、しかし、なぜ、そしてどのような眺望を重視すべきかについての拠り所が明確だとは言えない。

韓国において風水地理説に基づく良好な居住地には、魅力的な眺望の場がある。中でも、風水理論上中心的な場所に立地した宗家と、宗家に住む貴族の専用の休息空間である亭は眺望に優れることでよく知られる。

このような良好な居住地において、宗家と亭からの眺望という概念がいかなる形態で現れ、地形認識や環境認識においていかなる役割を果たしているかを明らかにすることは、上記の問題を解決する有効な糸口となると考えられる。

そこで本研究では、風水地理説に位置付けられた村落中で、居住最適地とされる宗家と眺望が良いとされる亭とをとり上げ、両者の眺望、地形的立地の特徴及びそれらの相互関係を明らかにする。また、それにより居住空間における眺望の意味を考察する。

1-2 先行研究と本研究の位置付け

村落と亭に関する既存研究は、空間論や機能論を中心にいろいろな角度からなされている。ただし、宗家と亭を一体的に扱った研究は見あたらない。また、亭を個別に取りあげた研究においても、亭における優れた眺望性を指摘しているものの、その眺望の具体的な内容と意味にまで踏み込んだ考察は行われてない。

従って本研究では、村落の宗家と亭を同時にとり上げ、両者の立地の特徴や眺望の特色の相互関係に注目する。

第二章 研究の対象と方法

2-1 宗家と亭について

2-1-1 局について

従来、韓国の多くの村落の立地選定において、風水理論が

直接的・間接的に影響を与えてきたと言われている。風水理論は、韓国人が求めた理想的な居住空間を地勢によって判断することで、この理想空間を局という。

局が持つ一番顕著な特徴は主山と案山が形成する盆地のような地形である。(図-1) その中で重要視されて、中心的な場所は、穴と明堂である。理論上では、この穴と明堂は主山と案山を結ぶ軸上にあることが理想とされている。

2-1-2 宗家と亭

宗家は、2-1-1に述べた、局の中で、重要で中心的な場所である穴と明堂の位置に、その村落で位が高い貴族が初めて建てた家である。宗家の立地と深く、関わりがある坐向論とは、単一指向性を示す概念であり、背面を坐、正面を向と呼ぶ。

亭はそれ自体が風流の場であり、休息の空間である。また、これは自然の景観を考慮し、周辺との調和を図りながら、眺望が良いとされる場に築造した施設である。韓国の亭に関する記録、高麗末李奎報の東国李相国集の「四輪亭記」では、四方が開放的な空間、内は空間が空いている、高く建てられたものを亭と定義している。つまり、柱が屋根を支えて、壁がなく四方が開放されて、眺望と通風及び採光に良好に建てられたものが亭の一般的形態である。亭は構造的な側面では柱と屋根、壁がない開放的なものが建築としての一般的形態である。

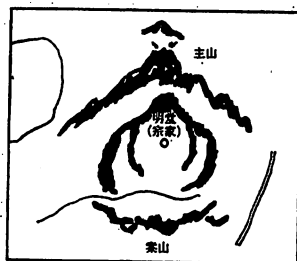


図-1 局の概念図

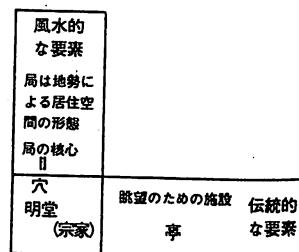


図-2 宗家と亭の位置付け

宗家は風水的な要因と伝統的な要因の両方の影響のもとに

あることが明らかであるのに対して、亭の思想的背景は明確にされてない。しかし、伝統的な要素であることは言える。

本研究で扱った亭の全ては宗家に住んでいる貴族が建てた主人の専用の休息空間である。

なお、宗家と亭の床の高さ、これらを取り囲む塀の高さは、外からの視線をさえぎりながら、内部からの良好な眺望を確保できるよう、注意深く決められている。

2-2 村落の選出

次の条件をみたす村落を研究対象とする。①地域的限定は慶尚北道とする。*) ②文化財指定を受けた亭があること。③「慶北村誌」による風水との関連性があること。④地形など大規模改変がないこと。⑤五千分の一地形図上に宗家と亭の位置が確認できること。⑥①から⑤をみたす村落のうち、②をみたさない亭がある場合、朝鮮時代(1392~1910)に建てたものは含む。**) 最終的には18村落の19件の宗家、45件の亭を選定した。

現地調査項目としては、5000分の1地形図上に宗家と亭の位置をプロット、主山と案山の確認、宗家と亭の向き、村林有無、宗家と亭からの主山や案山や村林の写真撮影、その他村落に関する聴取などである。

*) 李重煥の「擇理志」中で、「朝鮮の八道中で、地理が一番美しいところが慶尚道」と、全国のどこよりも住みよい場所と書かれ、かつ、亭の数も全国で一番多く存在していることより、村落と亭の代表性があると思われる。

**) 亭の造営が朝鮮初期以後一般化し、亭の特徴がよくわかる。また、年代別亭の役割分担を明らかにする。

2-3 分析の方法

分析の方法としては、①宗家と亭からの重要な眺望対象がなにかを現地調査を行った。②その重要な眺望対象がどのように見えるかを計量化、また、C.G.による検証を行った。

第三章 宗家と亭の立地の特徴

3-1 宗家の立地の特徴

宗家の立地上の特徴は以下の通りである。

(1) 主山の山麓に立地：本研究の対象地18村19件の宗家のうち、14村15件に該当する特徴である。これは、風水思想が入る前にすでにあった韓国の伝統的な居住地の立地理論である背山臨水の基本的原則でもある。

(2) 主山と案山の軸線上に立地：本研究の対象地18村内、案山がないと言われている素山里を除いて、17件の宗家のうち、12件に確認される。軸上にあることは、国都や邑城スケールでは風水理論上の理想とされており、これが村落スケールにおいても踏襲されていると言える。

3-2 亭の立地の特徴

亭の立地上の特徴は以下の通りである。

(1) 局の縁(ふち)に立地：本研究の対象地18村のうち、14村を占める。また、全ての45件の亭のうち、31件が局の縁に立地している。

(2) 宗家よりも案山側に立地：亭は宗家を基準として、45件の亭の内、40件が案山側(反主山側)に位置している。

(3) 主山-案山の軸外に立地：亭は45件の内43件が主山-宗家-案山の軸線上に立地していない。

(4) 宗家から近距離景域内に立地：局の規模とは関係なく、45件の亭の内84%にあたる38件は、600m以内である。

(5) 宗家と亭の標高はほぼ等しい：宗家から亭を見ると、仰角は、45件の亭の内35件は、 $\pm 2^\circ$ 未満の範囲におさまっている。これは、宗家との間に高さの差の認識ができない範囲である。亭は眺望性を高めるために標高ができるだけ高い場所に立地したとは言いがたい。

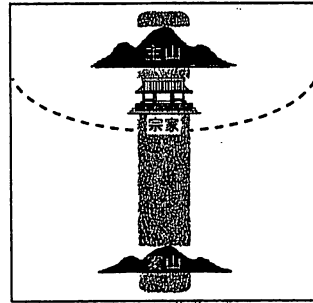


図-3 宗家の立地概念図

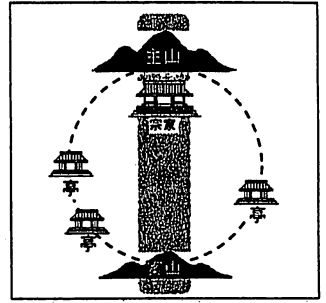


図-4 亭の立地概念図

3-3 村林の立地の特徴

村林が風水地理説上理想的な局を補完的に形成することについては先行研究が明らかにしているが、その形成原理は未詳である。

本研究では宗家からの眺望を操作するという意味合いからこれを4章2節において考察し得た。(4-2参照)

第四章 宗家と亭からの眺望上の特色

4-1 宗家と亭からの眺望の定義

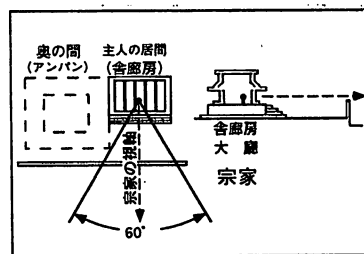


図-5 宗家の視点場の模式図

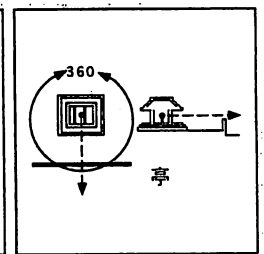


図-6 亭の視点場の模式図

2-4で述べたように、その眺望性をより高めるような構造をもつ宗家と亭の眺望方向について以下のように定義する。

- ①宗家からの眺望の場合、坐向論に従い視点場である舎廊房(主人が主に生活する場)あるいは、大廳(広い板の間)に開いている方向(=宗家の視軸)を中心に静視野 60° 以内。
- ②亭は坐向論との関係は希薄であるとされるため、物理的な障害物(山、丘等)がなければ、亭の眺望範囲は全方向。

4-2 宗家からの眺望上の特色

1) 案山への眺望

表-1に示すように、案山がないと言われている素山里を除けば、全ての宗家が案山への眺望を可能にしている。すなわち、宗家からの眺望は案山を重視したと考えられる。

a) 案山の見え方

表-2から以下のことがわかる。①案山の見かけの大きさは既存研究で明らかになっている眺めやすい視角の範囲(仰角 9° 近傍)にある。②宗家の視軸に案山がある。いわゆる、静視野 60° 以内におさまっている。

すなわち、案山は「図」として眺めやすい視角に入っている。さらに、案山が静視野に入っていることから、案山への眺望を非常に意識していたと言える。

b) 宗家が主山-案山の軸上に位置しない場合について

3-1で述べたように、宗家の7割以上が主山-案山の軸上に

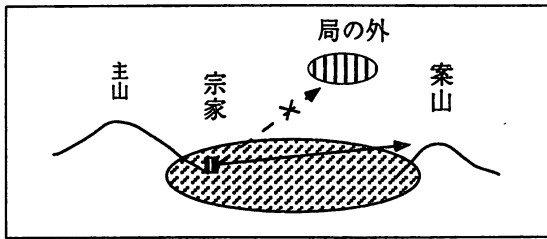


図-7 宗家における眺望の概念図

表-1 宗家における眺望対象

眺望対象	1 案山	2 亭	3 主山	4 局の外
村名				
1 梧籠里	○	○	○	X**
2 河回里	○	○	○	X**
3 川前里	○	○		X**
4 沙村里	○	○	○	X**
5 渚谷里	○	○		X*
6 來儀里	○	○		X*
7 籠谷里	○	○		X*
8 鳳溪里	○	○		X*
9 佳川里	○	○		X*
10 仙源里	○	○		X**
11 良洞里孫 良洞里李	○			X*
12 亀尾里	○	○	○	X*
13 巨村里	○	○	○	X**
14 養山里	なし	○		X**
15 三梅里	○	○		X*
16 金溪里	○			X*
17 妙里	○	○		X*
18 西谷里	○	○		X*

注: 1) *は地形的な要因によって局の外への眺望は抑制されている。
2) **は植林等の操作によって局の外への眺望は抑制されている。

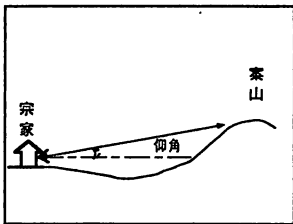


図-8 案山への仰角概念図

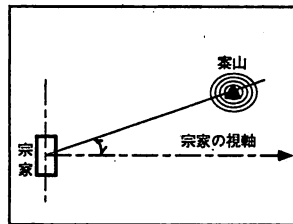


図-9 案山へのずれ角概念図

表-2 宗家から案山への仰角とずれ角

分析内容	標高 (m)		距離 (m)		仰角 (°)	ずれ角 宗家の視軸から 案山の山頂のず れの角 (°)
	宗家	案山	案山	主山から 案山まで 距離		
村の名称						
1 梧籠里	320	492	2,000	4,450	4.9	31
2 河回里	80	364	2,400	4,000	6.8	2
3 川前里	110	269	2,350	2,800	3.9	8
4 沙村里	165	353	1,550	2,730	6.9	22
5 渚谷里	120	263	1,850	2,650	4.4	*
6 來儀里	74	193	1,950	2,500	3.5	*
7 籠谷里	125	175	1,400	2,250	2.1	*
8 鳳溪里	100	626	1,900	2,150	15.5	19
9 佳川里	314	525	1,060	1,600	11.3	*
10 仙源里	120	204	1,050	1,400	4.6	1
11 良洞里(孫) 良洞里(李)	38 33	109	630	1,220 1,220	6.4 8.5	14 20
12 亀尾里	110	273	940	1,200	9.8	33
13 巨村里	268	336	530	980	7.3	14
14 養山里	85	なし			**	**
15 三梅里	170	283	390	950	16.2	6
16 金溪里	118	177	400	800	8.4	0
17 妙里	54	87	500	680	3.8	5
18 西谷里	208	261	400	520	7.6	5

注: 1) *は宗家が消失したため不明。
2) **は案山がないと書かれている。

立地している。これは風水地理説上の理想と考えられるが、例外として河回里、渚谷里、仙源里、亀尾里、巨村里の5村がある。これらの例外は案山の見え方と深い関係をもつことがわかった。河回里をとりあげ考察を行う。

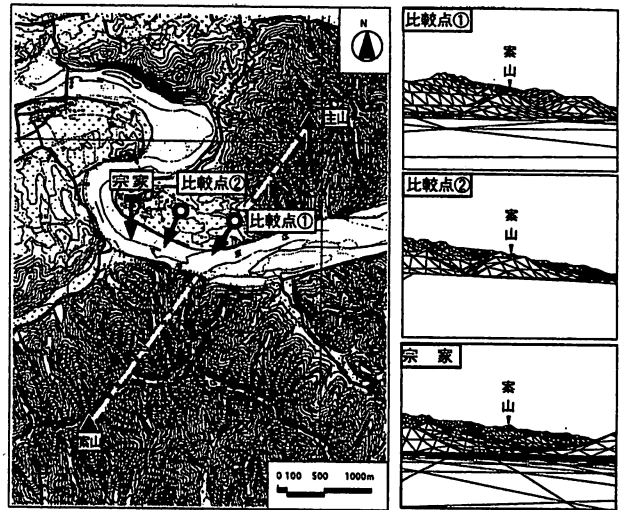


図-10 C.Gによる宗家から案山への眺望の検証 (河回里)

主山-案山の軸上の主山の山麓を比較点①とする。その比較点①からは、図-8に示すように案山の山頂を見ることができない。比較点①から現在の宗家の方向に視点を移動する際、案山の山頂が初めて見える位置を比較点②とする。その比較点②から見える案山の山頂は、図-8に示すように前方の山が大きく見えることにより、案山は明確に認識できない。それに対し、現在の宗家からは、図-8に示すように案山の山頂がより先鋭化して見える。

つまり、宗家が主山-案山の軸上に立地していない理由は、眺望の観点からみると、案山を良く眺望するためであると説明できる。他の4村に対しても同様のことがいえる。

c) まとめ

以上より宗家から案山が眺望できるということは重要な要件になっていると言える。

2) 亭への眺望

案山への眺望に前述したように、宗家の視軸からは、静視野60°以内に案山がおさまっている。しかし、静視野60°以内の眺望範囲に入る亭の数は、分析が可能な22件の亭のうち、27%である6件の亭にすぎない。

案山が視対象として明らかに重要視されていたのに対し、亭は、宗家の視軸の方にこないように配置されていることから、主要な視対象として位置付けられていたとは考えにくい。ただし、見ようと思えば、良洞里(李)と金溪里を除けば、全ての村落において、一件以上の亭は眺望が可能である。

宗家から亭が見えることは、亭が視点場である同時に村落風景の点景構成要素であると考えられる。さらに、アップルトンと中村のことはを借りれば、二次的景観体験と仮想行動を誘い出すということである。

3) 主山への眺望

主山は宗家の向きと反対にある。かならず、主山を背にして建っていることから主山を見ることを重要視していないと言える。実際、主山は、19件の内5件から見えるに過ぎず(表-1)、主山への眺望を意識していたと言うことはできない。むしろ、主山の眺望よりも主山との一体感を重視したと考える。

4) 局の外への眺望は抑制

宗家から局の外の眺望は、自然地形的な要因と村内の林等

の操作により抑制されている。村林は、特に宗家からの局の外の眺望を抑制するのに効果的な場所に造成されている。局の外への眺望を押さえることにより、局の圍繞感を演出していたと考えられる。

その村林の意義は、眺望を物理的に抑制することではなく、象徴的に「見えない」という意味をあらわすためである。

4-3 亭からの眺望上の特色

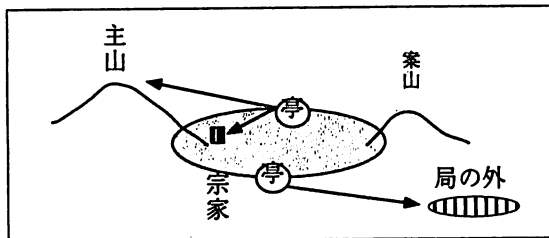


図-11 亭における眺望の概念図

表-5 亭における眺望対象

眺望対象 村名 亭	眺望対象			
	1 局の外	2 主山	3 宗家	4 案山
1 栢廻里 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
亭3	●	●	●	●
2 河廻里 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
亭3	●	●	●	●
亭4	●	●	●	●
3 川前里 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
4 沙村里 亭1	●	●	●	●
5 落谷里 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
亭3	●	●	●	●
6 來儀里 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
7 籠谷里 亭1	●	●	●	●
8 風漢里 亭1	●	●	●	●
9 徒川里 亭1	●	●	●	●
10 仙源里 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
亭3	●	●	●	●
11 良洞里 (孫) 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
亭3	●	●	●	●
良洞里 (李) 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
亭3	●	●	●	●
亭4	●	●	●	●
12 竜尾里 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
亭3	●	●	●	●
亭4	●	●	●	●
13 巨村里 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
14 素山里 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
15 三梅里 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
亭3	●	●	●	●
16 金漢里 亭1	●	●	●	●
17 砂里 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
18 西谷里 亭1	●	●	●	●
亭2	●	●	●	●
亭3	●	●	●	●
眺望の比率 (%)	33/45 (73)	30/45 (67)	30/45 (67)	23/45 (51)

1) 眺望の中心のひとつは局の外の風景である。表-3に示すように、全45件の亭のうち、33件の亭は局の外を眺望できる。特に注目すべきは、最初に建てられた亭(表中亭1に該当)で、ただ一つの例外を除き、全て局の外の風景の眺望を可能にしていることである。

2) 眺望の中心のもうひとつは主山と宗家の同時眺望である。全45件の亭のうち、26件の亭である。

局の外への眺望、主山-宗家の同時眺望は、何れも、宗家からでは得られないものであり、亭の立地と深く関わりがある。

4-4 宗家と亭の眺望意味の考察

宗家からの眺望の意味は、風水地理説上の環境の優秀さを

「局」内において実感するという点にある。特に案山への眺望によって、案山と対峙する主山、さらに主山の麓にあってそれと一体化した宗家が強く認識されるものと思われる。

それに対して、亭からの眺望の意味は、宗家からでは得られない眺望の充足にある。亭は局外への経験を開いて風水的世界から自己を解放する役割と、主山-宗家の一体性を確認し風水的安寧を再認識する両義的役割を帯びている。

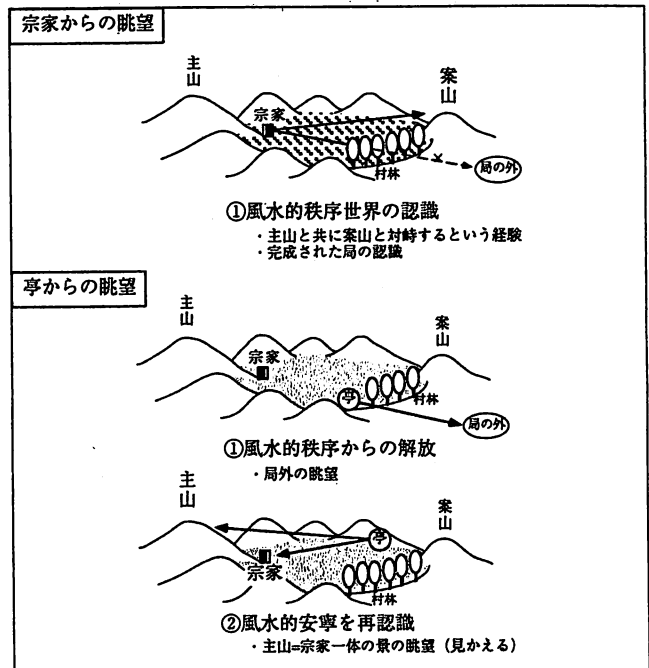


図-12 宗家と亭からの眺望意味の概念図

4-5 まとめ

以上をまとめると、宗家と亭それぞれのもつ眺望の役割は相互補完的關係であると言える。(表-4)

表-4宗家と亭の眺望上の関係

視 点 場	眺望対象	眺望体験の意味
風水地理説上の核心 宗家	局内の風景 案山	・風水の秩序世界の認識 (主山と共に案山に対峙するという経験)
伝統的な村落に特有の眺望施設 亭	局外の風景 主山と宗家	・風水の秩序からの解放 ・風水的安寧を再確認

第五章 結論

本研究の結論は次の通りである。

- 1) 宗家と亭の立地の特徴を明らかにした。
- 2) 宗家と亭からの眺望上の特色を明らかにした。
- 3) 宗家と亭からの眺望の意味を示した。
- 4) 宗家と亭の眺望の相互関係を明らかにした。

重要参考文献

1) 慶尚北道・慶北郷土史研究協議会：1990、慶北村誌 2) 慶尚北道：1997、指定文化財目録 3) 金徳鉉：1983、氏族村落の形成過程と立地及び儒教文化景観、ソウル大修士学位論文 4) 崔昌祚：1984、韓国の風水思想、民音社 5) 朴宰用：1989、風水地理説の思想的背景と都市形成の影響に関する研究、漢陽大修士学位論文 6) 斎藤潮：1990、視野との関連に着目した物的対象の配置に関する研究造園雑誌53-5 7) 中村良夫：1982、風景学入門、中公新書 8) 樋口忠彦：1975、景観の構造、技報堂 9) Appleton, J.: 1975, The Experience of Landscape, John Wiley